

地域力

支えあう和歌山



白浜レスキューネットワーク④

晩秋の夕暮れ、沈みゆく夕日
が穏やかな海を黄金色に染め
る。白浜町の景勝地・三段壁に
は、寄り添いながら夕日を眺め
るカップルの姿が見られた。

三段壁は今年4月、「恋人の
聖地」に認定された。年間10人
前後が飛び降り自殺するという
「自殺の名所」のイメージを払
拭しようと町が、ロマンチック
なスポットを「恋人の聖地」と
認定しているNPO法人「地域
活性化支援センター」（静岡市）
に申請していた。

三段壁には、結ばれない境遇
を悲観して心中した若い男女の
悲話にまつわる「口紅の碑」が
ある。2人が「白浜の海は今日
も荒れている」と口紅で岩の斜
面に書き残した文字を刻んだ。
町は「2人が永遠の愛を貫いた
場所」とアピールする。

町民生課福祉係の清宮（香さ
ん）30は「三段壁のイメージを
変えたい」と力を込める。自殺
志願者を保護し、共同生活をす
ることで自立を支援するNPO
法人「白浜レスキューネットワ

ーク」と連携、保護された人の
自立支援にも携わる。清宮さん
によると、ここ数年は三段壁に
たどり着くまでに保護されるケ
ースが多いという。夜中に「三
段壁に行つて」とタクシーに乗
ってきた女性を、運転手は気を
利かせて、NPO事務局がある
白浜バプテストキリスト教会や
警察に連れていく。土産物店の
店主も展望台の方を目配りす
る。一つの命を救うために民間、
行政、地域が支え合う。

この人も、三段壁に来る前に
保護された。現在、教会で共同
生活を送る77歳男性。2年前の
暮れ、NPO理事長で教会牧師
の藤数庸一さん（44）らの活動を
知る住民に連れてこられた。十
数年の放浪生活の果てに、死に
場所を探していたという。

無一文だった。男性は一体ど
んな生活を送ってきたのか。聞
くと、全国各地の寺で草むしり
や掃除を申し出てその報酬をも
らうなどして食いつなぎ、夜は
野宿でしのいできたという。
身寄りはいなかった。結婚して

77歳男性「生きている」と実感



④三段壁の展望台で寄り添いながら沈む夕日を眺めるカップル。三段壁は「恋人の聖地」に認定されている
⑤保護された男性の寝室には多数の書籍が並ぶが、男性は過去を多く語らない（白浜町で）

自主的にごみ拾い

いたが、妻は亡くなり子供もい
なかった。関東地方で会社を経
営していたこともあったが、負
債を抱えて倒産した。「借金は
全部返済した」後、放浪生活に
出たという。

男性は「行政の世話にはなら
ない」と生活保護を受けること
を拒む。ほとんど収入もない状

態で高齢者が一人、命をつない
でいくことは大変だった。た
う。絶望して何度も自殺を考え
たが「死のうと思う度に、誰か
が救ってくれる。私は幸せ者だ
よ」と笑う。ある日、首をつろ
うと木に上ったら、下にゲート
ポールをしていた老人グループ
がいた。老人たちは「下りとい

で」と言つて1000円ずつ出
し合つて男性に渡してくれた。
男性は保護されてから、地域
のごみ拾いを毎日続けている。
誰かから言われた訳ではなく、一
人の役に立ちたい」と自分の意思
で始めた。右手に火ばさみ、左
手にごみ袋を持ち、路上に落ち
ているたばこの吸い殻や空き缶
を拾い集める姿は、すつかり
地域の風景に溶け込んでい
る。笑顔で「ありがとう」と手を
をかける住民もおり、保護され
た当時は暗い表情を見せていた
という男性の顔はほころび、生
きているという実感が湧く。

他の保護された人らと共同生
活を送る寝室には多くの書籍が
並ぶが、男性は過去についてま
くを語ろうとしない。「人間は
裏切らないことが大事。親切に
してくれた人たちにお礼をし
ていきたい」とつぶやいた。
男性は一見、安定した状態に
見えるが、藤数さんによると、
何度か教会を出て行ったことが
あったという。その度に捜して
連れ戻した。男性は「お世話に
なりっぱなしになる訳にはいか

【編集委員・桜井由紀治】
※次回は12月5日掲載予定。